

2. 臨地実習における看護学生の患者へのケアリングの実践

○内海 千鶴（明石医療センター附属看護専門学校）
掛橋 千賀子，藤野 文代（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに

国民の医療への期待の増大、保健医療福祉サービスの多様化により、看護職には他職種との連携などの役割の拡大が期待されている。看護教育においては、そのような期待に応える事のできる看護者の育成が喫緊の課題となり、看護実践能力育成の充実に向けて卒業時の到達目標が示されている。その冒頭には「ヒューマンケアの基本的能力」の育成が掲げられている。

臨地実習はケアリングを体得できる貴重な学びの場であり、学生が自らの経験を看護の視点で意味づける教員の関わりが重要である。しかし、教員は学生個々にじっくり関わるのが困難で、ケアリングの教育に苦慮している現状がある。学生の経験を意味づけられるよう教員が関わるには、まず学生が患者にどのようにケアリングを行っているのかを知ることが必要と考える。そこで、本研究では看護学生が臨地実習で患者との関わりにおいて、どのようにケアリングを実践しているのかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究
2. 研究対象者：C地域所在の看護専門学校（3年課程）、A校とB校に在籍する、領域別実習が終了した3年次生18名
3. 研究期間：平成25年11月～平成26年2月
4. データ収集方法：研究の主旨に同意が得られた看護学生18名にインタビューガイドを用いて半構成的に面接を行った。面接はプライバシーの保てる場所で30～60分程度とし1回行った。面接内容は許可を得てICレコーダーに録音した。
5. データ分析方法：録音内容から逐語録を作成し、ケアリングの実践に関する記述をデータとして抽出しコード化、更にカテゴリー化した。全過程において質的研究の専門家によるスーパービジョンを受け真実性・妥当性の確保に努めた。
6. 倫理的配慮：関西福祉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て、本研究を実施した。

III. 結果

インタビューの結果、看護学生が臨地実習において患者に行ったケアリングの実践は、【人間の尊厳を保てるよう患者を尊重し援助する】【患者のためになるよう状況に向き合い対処する】【患者を把握できるよう感性を働かせ関わる】【感情を自由に表出できるよう話せる雰囲気を作り出す】【気持ちを和らげ支えられるよう癒しの場を作り出す】【ニーズの充足ができるよう患者に合わせた援助を工夫する】【意欲を引き出し継続できるようコーチングをする】【援助を行う中で信頼を築き関係を深めていく】【患者からの学びを自己の成長に繋げる】の9のカテゴリーに集約された。

IV. 結論

本研究で得られた9つのカテゴリーは、ワトソンの10のケア因子の9つの因子に相当し、看護学生はワトソンケア因子を患者へのケアリングの実践として行っていたことが確認できた。